

矢野電設株式会社 代表取締役 矢野 宏 氏



水戸市に本社を置く矢野電設株式会社は、1944年に創業し、県内のほぼ全ての交差点の交通信号機を施工するなど、交通信号機施工のパイオニア企業として走り続けています。

交通信号機は生活に密着したインフラです。施工時は利用者の安全を守り、不便を最小限に抑えるため、施工前に徹底した危険予知と綿密な事前準備を行っています。

また、人材育成では「自分の考えや感情と向き合い、誰かに認められる体験」によって全社員の“想いのベース”を揃え、バランスの取れたチームづくりを成功させました。

交通の未来を見据え、果敢に挑戦し続ける同社の取り組みを取材しました。

インタビュー日：2019年8月6日
〔聞き手：筑波総研(株) 取締役社長 野口 稔夫〕
〔文・写真：筑波総研(株) 主任研究員 富山かなえ〕

企業概要

本 社：茨城県水戸市河和田町3449番地2
営 業 所：千葉県成田市新田28番地1(千葉営業所)
出 張 所：栃木県下野市石橋237番地4
La Porte302号室(栃木出張所)
創 業：1944年(昭和19年)2月
事業内容：電気工事、交通信号機工事、とび・土木・
コンクリート工事、電気通信工事、
建設コンサルタント(土木)
従業員数：22名

創業の歴史や矢野社長が事業に携わるようになった経緯についてお聞かせください。

交通信号機施工のパイオニア企業

当社の歴史は、1944年に私の祖父 峰が水戸市で矢野電気商会を創業したことに始まります。祖父は国鉄を退職後、鉄道信号機の施工業務を始め、その事業は父 雄厚に引き継がれました。

父の時代には、踏切や駅舎間をつなぐ通信システム工事にも携わるようになったほか、鉄道信号機の施工実績が評価され、交通信号機の施工依頼も受けるようになりました。

当社が最初に手がけた交通信号機は、水戸市三の丸にある水戸中央郵便局前の交差点です。その後、当社は県内にあるほぼ全ての交差点の信号機を施工するまでに成長し、現在も交通信号機施工のパイオニア企業として走り続けています。

「父とは分かり合えない」と感じた少年時代

父は海軍出身で、何事にも大変厳しい人でした。私が小学3年生の頃の話ですが、友達と野球の約束をしていた日が雨になったため、家で漫画を読んでいると、父から「友達と約束したなら、雨でも行って来い。たとえ誰も来なかったとしても、お前だけは約束を破るな」と厳しく叱られたことを今でも覚えています。

その後も叱責の日々が続き、私は「父とは分かり合えない」と感じるようになり、反発・反抗するようになりました。その憂さを晴らすように高校では空手の練習に明け暮れ、卒業後は大学には進学せず、陸上自衛隊に入隊しました。

厳しい訓練の日々でしたが、自衛隊の業務は自分の性に合っていると感じ、このまま続けていこうと決心していました。しかし、ある日突然、上官から呼び出しを受け、こう言われたのです。



当時の思い出を語る矢野社長

「実は、先日、お前の父親が来て、『たった一人の息子だから、後を継がせたいと思っている。返してもらいたい』と言ってきた。お前はどうするつもりだ。」

私はその言葉を聞いて驚愕しました。なぜなら、長年「お前には期待できない」と言われ続け、父から憎まれているとさえ思っていたからです。

しかし、長年の父の厳しい言葉は、私を育てるための思いやりであったと、その時に初めて理解することができました。その後、私は自衛隊を退職して水戸に戻り、父の知人が経営する電気工事会社に修行へ出ました。

窮地を救ってくれた人情味溢れる職人魂

同社での修行中、生涯決して忘れることができない強烈な出来事がありました。それは、水戸市内を通る国道50号バイパスの開通に向けた街路灯工事でのことです。

修行先の会社が経営不振に陥ったことから、材料納入時期の見込みが立たず、下請業者も現場に来ないため、当初の工程計画が大幅に遅れてしまいました。また、その状況を心配したお客様からはクレームが相次ぎ、現場代理人の私は緊迫した状況に追い込まれてしまいました。

一方、他の建設工事は着々と進んでいるため、私は非常に苦悩し、1人で作業を続けていました。そんな時、その状況を見かねた建設会社の職人たちが、「矢野さん、手伝ってやるから、指示だけしてくれよ」と手を差し伸べてくれたのです。

改善策を見出せず行き詰っていた私は、金銭のことなど口にしない彼らの情に満ちた申し出に強く心を打たれました。今でも本当に感謝しています。

「50円のライス」で腹を満たす日々

その後もなんとか工事は続きましたが、給与遅配で、私は貯金を切り崩しながらの生活となり、公私共にギリギリの状況に追い詰められました。

お昼になると、現場近くのラーメン屋に行って50円のライスだけを頼み、席にある調味料で味付けして口に掻き込み、午後の活力としていました。

しかし、ある日、店主から「ライスはサービス品。毎回それだけ食べられては正直困るよ」と言われ、私は顔を真っ赤にして店を後にしました。

それからは、情けない気持ちを抑えて公園の水で腹を膨らませ、時に潰れたパンを頬張りながら苦しい日々を乗り越えました。

数日が経った頃、建設会社の職人に「ラーメン屋の親父が呼んでる」と言われ店に向うと、店主から「そこに座れ」と言われました。しばらくすると、目の前にラーメンとライスが並びましたが、私は何が起きているのか理解できませんでした。

店主は「給料も出ないのに仕事を投げず、一生懸命働いている感心なやつだって、現場の職人から聞いたよ。出世払いで良いから、いつでも食べに来な」と私を激励してくれたのです。この時の店主の言葉を思い出すと、今でも涙が溢れ出てしまいます。

■ 道路開通の1時間前に街灯工事が完了

この追い詰められた状況を父に相談しましたが、「この世界で飯を食って行きたいなら、最後までやり通せ」と、一言言われただけでした。

後に分かったことですが、私の話を聞いた後、父は職人の確保や遅れていた材料費の負担保証などを買って出てくれていたそうです。

私は必死に作業を進め、全ての工事が完了したのは、開通式典の参列予定者が集まり始めた道路開通の1時間前のことでした。

現場監督からは「三日前に街灯が道に転がっていたから終わらないと思っていたよ。あんたは良く頑張った。大したもんだ」と言葉を掛けて頂いた時には目頭が熱くなりました。

■ 「仕事をやり切ること」の大切さに気づく

修行先を離れた私は、当社の営業として中央官庁に足を運ぶ機会が多くなりました。最初はどの部署に行くべきか分からず、目に入った部屋で「水戸から来た矢野電設です！」と大声で挨拶すると、奥から、何事だと言わんばかりに職員が現れ、入札関連部署を紹介されたこともあります。恥ずかしい思い出ですが、当時の私は必死でした。

ある時、国土交通省を訪ねると、50号バイパスの工事でお世話になった監督が室長に昇格されていました。私が父の会社に戻ったことを伝えると、「それは良い事だ。機会があれば、競争入札に指名するよ」という言葉を頂くことができました。

この時、父の言葉の意味がやっと理解できました。「どんな状況に置かれても、最後まで一生懸命仕事をやり抜く姿は、必ず誰かの目に留まり、信頼を勝ち取ることができる」。この真理は、それまでの人生で最も大きな気づきでした。

御社の企業理念や事業概要、事業の転機、人材育成などについてお聞かせください。

■ 生活に密着したインフラ「交通信号機」を守る

当社の企業理念は「交通信号機及び電気設備工事を通じて交通安全の確保に寄与すると共に地域の住環境の整備、向上に貢献する」です。

現在、当社が行う事業の約8割は、交通信号機関連です。具体的には、交通信号機の新規施工のほか、県北地域にある約1,500ヶ所の交差点の保守・点検を行っています。沿岸部では塩害による鉄の腐食、山沿いでは風の影響によるズレなどが起こりやすいため、細心の注意が必要です。

交通信号機は生活に密着したインフラであり、「点灯していて当たり前」です。施工時は道路使用者の安全を守るだけでなく、常時流れている交通の停滞や不便をいかに最小限に抑えるかが重要になります。そのため、当社は施工前に徹底した危険予知と綿密な事前準備を行っています。



社内に設置された交通信号機の施工練習場

■ 労働災害が発生し、自分を責め続ける日々

2009年、当社はさらなる事業拡大を目指して埼玉県に進出しました。ところが、その翌年に重大な労働災害を起こしてしまいました。交通信号機の保守・点検中、運送会社の大型トラックが高所作業車に激突し、作業していた社員が転落して肺を損傷してしまったのです。

一刻を争う事態にドクターヘリが出動することとなりましたが、幸いにも一命を取り留めました。しかし、社内では今回の労災への不安から退職者が増え、同業者からは当社の安全管理体制を疑問視され、多くの方から責任を厳しく追求されました。

私は会社を大きくすることだけに意識を集中していたあまり、作業員の安全管理の面が疎かになっていました。それに気が付いた私は深く、激しく後悔し、自分を責め続けました。

■ 絶望の淵で語り掛けられた『大丈夫』

絶望の淵でもがいている時、私はある月刊誌と出会いました。その冊子は、偉人の体験をもとにした「人間学」に焦点を当てたものでした。

私は同誌の広告欄に「あなたの会社も確実に変わる」という文言を見つけ、藁をも掴む思いで宇都宮で開催されたセミナーに参加しました。

会場では、参加者が4人1組になって意見交換を行い、私は自社で起きた労働災害に対する強い自責の念について語りました。

すると、参加者の1人から、「あなたは責任から逃げず、現実を直視し、社員に対しても強い謝罪の気持ちがあります。これから会社をより良い方向に立て直そうとしている。あなたは、きっと大丈夫ですよ」と優しく声を掛けて頂きました。

その言葉は私の琴線に触れ、思わず涙がこぼれました。そして、私は、「自分の考えや感情と向き合い、誰かに認められる体験こそ、今の当社社員に必要なことである」と感じたのです。

■ 「人間力」を高め、チーム力を強化する

その後、当社では全社員が月に1度集まり、平日午後の40分間、月刊誌の感想やそれぞれの考えや想いを共有する時間を設けました。

相手の話を聞き感想を述べる際のポイントは「美点凝視」です。相手の短所や欠点ではなく、長所や美点に目を向け相手を認め、肯定することで人間力が向上し、本当に大切にすべきものが見えてくると考えています。

また、社員と真摯に向き合うことで、「社長はこのような考えを持って仕事に取り組んでいるのか」と、自分の意志や考えを社員に感じ取ってもらえる機会にもなっています。

導入当初は、社員から「新興宗教ではないか」と抵抗されました。しかし、7年目となった今では、社員が垣根無くコミュニケーションを取るようになり、社内は笑顔に溢れています。

正直、埼玉での労災が起こる前は、指示された作業だけを黙々とこなす社員が多く、社内は殺伐とした雰囲気が漂っていました。

しかし今では、全社員の“想いのベース”が揃い、一人ひとりが責任を持って仕事に励むことができるバランスの取れた素晴らしいチームに生まれ変わりました。それは、当社の工事における安全性の向上にも確実に繋がっていると自負しています。



交通信号機の重量を確認する様子

最後に、今後の事業展開の鍵となるものについてお聞かせください。

■ 「交通信号機×5G」で交通の未来を担う

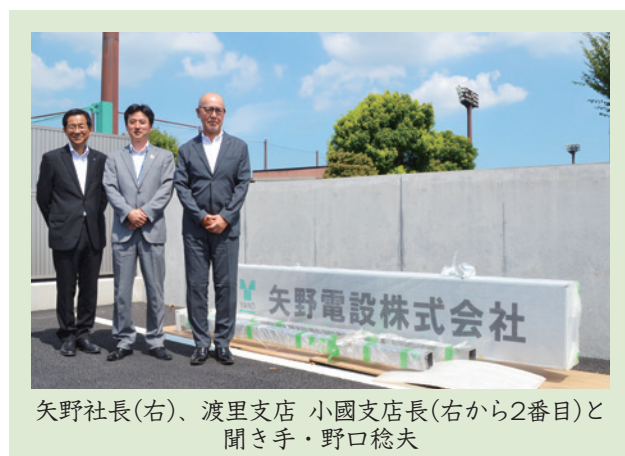
交通信号機は昔と比べると形が変化し、軽量化も進むなど日進月歩です。近年では、カメラが取り付けられ、交通事故の証拠記録としての活用や犯罪の抑制にも役立っています。

また、国は次世代通信規格「5G」の基地局として、交通信号機の活用を検討しています。交通信号機を活用することで、信号機の集中制御エリアの拡大や自動運転社会などを見据えた、より安全で円滑な交通の実現などが期待されています。

国レベルで、交通信号機を5G基地局として利用しようとする試みは、世界初です。当社はこれをさらなる事業展開の鍵と捉えており、通信部門の新設なども検討しています。

今後も、「交通信号機施工のパイオニア企業」として全社一丸となり、交通の未来をしっかりと支えていきたいと考えています。

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。



矢野社長(右)、渡里支店 小國支店長(右から2番目)と聞き手・野口総夫